

沖繩問安記 『新たな歩みへ向けての備えの時』

大会伝道局書記 齋藤 修

いつも大会伝道局の働きを覚えて祈り、様々な形でお支え下さいますことを心から感謝いたしております。大会伝道局では、去る6月20日(火)～22日(木)、沖縄県西原町役場建設部都市整備課と「西原西地区区画整理事業」期間変更(延期)に伴う対策等打ち合わせのために理事長田部郁彦、書記齋藤修、沖縄担当理事南安夫の3名が沖縄伝道所を問安しました。

20日(火)那覇空港到着後、直ちに西原町西地区区画整理事業現地(旧沖縄伝道所所在地及び新沖縄伝道所所在地を含む)を視察し、同事業工事の進捗状況を確認しました。

翌日は、午前10時から沖縄伝道所仮礼拝所で行われた同伝道所の祈禱会に出席しました。今回も同伝道所問安時には数年来行われてきましたように、理事が祈禱会の奨励を行い、祈りを合わせました。今回の奨励は理事長田部郁彦でした。祈禱会出席者は沖縄伝道所牧師川越弘先生ご夫妻、同伝道所委員2名、理事3名でした。祈禱会后、懇談の時を持ち、昼食を共にし、午後、西原町役場に行き、建設部都市整備課主事(補償係)、換地係長、工事係主任技師、他1名の4名と「西原西地区区画整理事業」期間変更(延期)に伴う対策等について同町役場小会議室にて打ち合わせを致しました。こちらからの出席者は祈禱会に出席した沖縄伝道所牧師川越弘先生ご夫妻、同伝道所委員2名、私達理事3名の計7名でした。

打ち合わせ及び確認事項は、大きくは3点です。

1. 現仮礼拝所での場所は会堂建築まで使用できるか。2. 現事業期間変更(延期)によって生じる新たな物件移転補償契約、損失補償の契約内容等の交渉について。3. 物件移転損失補償及び仮換地事前使用の文書における要請等です。この協議を受け大会伝道局では、2017年7月20日付けで、大会議長富永憲司、大会伝道局理事長田部郁彦、沖縄伝道所牧師川越弘、3名の連名で西原町長上間明宛、那覇広域都市計画事業西原西地区土地区画整理事業の施工工期延長(遅延)に伴い生ずる損失補償についての要望書、として提出しました。主な要望事項(項目)は以下の7点です。

1. 土地区画整理事業計画変更(内容、期間)に関する公文書の要求。2. 同事業期間延長(遅延)に伴う物件移転補償の見直しについて。3. 移転、損失補償の見直しに際し、新たに契約の変更を行う場合の方法、内容、時期等(契約書の様式)について、速やかに文書での回答を求める。4. 区画整理に伴う宅地造成工事の進捗状況の通知及び工事遅延理由についての解答。5. 仮換地の事前使用予定時期の早期通知。6. 当土地区画整理事業計画に伴い生じた諸事態への対応及び処理のために要した(宗)日本キリスト教会の人的、財的、時間的負担に対する補償の考慮、検討。7. 教会堂が宗教施設である故の不可視的、内面的、精神的損失についての配慮と補償について。

大会伝道局では、要望書に対する回答を第67回大会に報告できることを願っています。

岡山伝道所の近況報告

岡山伝道所応援教師 三瓶長寿

大会伝道局理事会

田部郁彦先生

岡山伝道所近況報告を申し上げます。

1. 教会の霊的面では少しずつ成長を許されているように思います。祈禱会は「蔵言」を終え、今年「コヘレトの言葉」に入りました。

修養会は主題「神の国をめざして～人間としての成長・神の子としての成長」で、聖句は「キリストの満ち溢れる豊かさにまで成長する」(エフェソ4:13)です。人間としての成長が教会の成長を、教会としての成長が人間としての成長をもたらすことを頻って実施しています、6月に4人の発題で語り合い、秋に牧師の講演を聞きます。

2. 礼拝は現住陪餐会員の他、客員(男1名、女2名)、求道者(男3名、女2名)で、出席者の入れ替わりはなく毎日曜日落ち着いて礼拝を守っています。

年末から60代男性の聾啞者が礼拝に出席するようになり、礼拝説教やSS説教、祈禱、聖餐式の祈禱など、すべてをプリントし、5名の介助者が交互に補助して礼拝を守っています。また水曜日午後、彼の求めに応じて牧師と二人で「第2祈禱会」を開いています。

(求道者に熟練した手話通訳者がいるのですが、日曜日に県市のボランティアの集いが多く、毎回出席できません。)これらの準備は牧師他に多くの重荷を与えていますが、兄弟の出席は教会の交わりの質を大きく変え、たくさんの賜物を与えられています。委員会に転入会の願いを申し出、6月から準備を始めました。

また年の初めから婚約している男性(求道者、30代)女性(受洗者、20代)が来会し、礼拝を守り、転入と受洗を希望し、6月から準備をはじめまし

た。これは女性の属する教会の牧師から、信仰者の家庭を築くなら日本キリスト教会で信仰生活をするように勧められて来会しました。これらの3名は神さまによって突然導かれた方々で、人柄もよく、み言葉によって順調に信仰に導かれ、クリスマス頃受け入れることができればと願っています。

3. 5月に近畿中会応援伝道で澤正幸牧師を迎えて春のオープンチャーチを開き、大きな祝福を受けました。この報告は先にお送りしましたので省略いたします。7月に入って9月にもたれる大会伝道局の応援伝道、講師久野牧師の秋のオープンチャーチの準備を始めました。結果は神さまの御手にあり、福音の種を蒔く喜びを与えられています。

4. 今年に入って「修養会委員会」「伝道委員会」「ホームページ委員会」を解消し、全員で奉仕をする「ベタニアの会」に改組しました。これまでは小さな群れで流会もありましたが、いまは教会みんなで準備をするようになりました。

以上簡略ですが、報告申し上げます。

2017.7.3 三瓶長寿

今年度後半の大会応援伝道

伊達教会 9月24日(日)

講師 齋藤 修(磐田西教会牧師)

岡山伝道所 9月24日(日)

講師 久野 牧(函館相生教会牧師)

折尾伝道所 10月8日(日)

講師 南 純(東京中会無任所教師)

つくばひたち野伝道所 11月12日(日)

講師 持田克己(高槻教会牧師)

雲雀ヶ伝道所 11月19日(日)

講師 南 純(東京中会無任所教師)

伝道へのヴィジョン ～田部郁彦理事長の発題を受けて～

北海道中会伝道局理事長 八田 牧人

今回の大会伝道局理事会では、第66回大会での議論を踏まえ、大会伝道局の働きについて歴史的な歩みを踏まえ、これからをどの様に考えるかについて田部郁彦理事長の発題がなされた。

日本基督一致教会第3回大会記録に大会伝道局は諸外国からの支援を分配するものとある。1891年以降の旧日本基督教会では、中会が着手していない地域への伝道と外国ミッションからの独立となる。それ以降の大会の歩みと伝道局の方向性ないし方針とは重なり合っている。旧と新の日本キリスト教会の間には、伝道について連続性だけではなく非連続性も存在するが、大会が目指す方向性を担って来たのが大会伝道局であることは事実である。

県庁所在地での伝道という構想も、沖縄伝道の決議も、拠点伝道という考え方も、大会的見地に基づいてその実践を大会伝道局が担ったものである。今後の伝道についての大会としての拡がりを考えるとき、大会伝道地検証（第65回大会記録掲載）を踏まえ、どのように伝道し、どのような教会を建てるかだけでなく、イエス・キリストの福音をどの様に宣べ伝えて来たのかを吟味する必要がある。

つまり、①日本キリスト教会が目指す方向と別のものであってはならないし、②その方向性が明確に示され大会全体のコンセンサスを得られたか、③伝道地においてその方向性が示されて来たかが丁寧に吟味されることになろう。無牧師の群れが増大している現在、①地域の指定による支援、②複数の無牧師の群れを応援する教師の派遣等の応援や支援といったあり方も考えられる。しかし、選定や指定の方法は元より、大会全体のヴィジョンの有無や一致が求められるのではないだろうか。 (要旨文責:八田)

この発題を受けて思ったことは、「一致」とい

う言葉が現状において、教会の中でどれくらい重みをもっているかという自らも含めた問い掛けであった。発題の内容に対する賛否ではない。

日本キリスト改革派教会は教師・長老に対してウェストミンスター信仰告白を誠実に受け容れるよう誓約を求める。誓約への違反が認められれば戒規の対象となる。けれども一般の教会員には同等の誓約は求められない。日本キリスト教会では、信仰の告白と憲法・規則を誠実に受け容れることは教職・長老・委員・会員全てに平等に誓約を求められる。一団の教会としての一致が全体に求められていることになるが、それは誓約を重んじることによってのみ意味を持つ。しかし、果たして重んじられていると言えるだろうか。

日本キリスト教会では、エートスという言葉が用いられていた時代がある。しかし、それは遺訓ではなく、教会形成を目指して一緒に務めを担おうとする志の継承であった筈である。一緒に教会形成を担うという実感や責任が失われるなら、その教会像や教職像は、なされた誓約の下的一致から離れてしまう。誓約は方便となり、自説偏重や自己義認によって百花繚乱・枝分かればかりが進んでしまう。

現代社会の常識は、今や「自分が受けた重荷や痛みは他人も同じく受けるのが平等」と言い始めている。良い悪いや立場を論評するのではなく、キリストのもとにある一致を他者のために示す必要に迫られていないだろうか。一致のために・誓約を果たすために仕えるという群れの形成と教師・長老の育成といった教会像や教師像を明確化するべきだろうか。少なくとも、各中会と連携し、長老の研修（説教を聴くことから務めを考える）、説教が教会全体の良い意味での話題となることの支え、教会全体で実りを喜び感謝する姿勢の形成は、対処療法ではない伝道のあり方に通じると思わせられた。

大会応援伝道の報告 滝川教会

滝川教会長老 照井 勝

今年、滝川教会では伝道開始124年を迎えました。近年の状況は、若年会員の減少と高齢で礼拝出席困難者が増えるなど、地域伝道と教会形成に多くの課題を抱えています。一昨年、大会伝道局より大会応援伝道の提案を頂き、約一年間の協議を経た後、応援伝道に取り組むことにしました。

総会において、わたしたちは「主を賛美する民」であり、「主日礼拝」、「キリストの平和」、「信仰的、社会的困難の中にある人のために祈り、仕える」ことを今年の伝道の基本方針に決めました。これを受け、大会応援伝道のテーマを「今、社会の中で様々な困難から苦しみ、救いを求めている人々へ福音を真の救いとして届けるために」としました。ポスターとチラシを制作し、滝川市内への新聞折込み10,000枚と会員による戸別配布、手紙による案内などを行い、その日を待ちました。

2017年6月25日（日）、小野寺ほさな牧師（荻窪北教会）をお招きし、午前10時より主日礼拝、そして午後1時30分から講演会を開催しました。主日礼拝では「主に結ばれているならば」と題し、

詩編128編、コリント（一）15章28節を通してみ言葉が語られました。「幸せとは何でしょう？」と、穏やかな声での問いかけから始まり、辛い日々の中でも神さまを想い、感謝して生きる人々の人生について考えます。そして、一人ひとりが十字架の死と復活の主イエスと結ばれ、主と共にある人生がいかに幸いであるか、との心に響くメッセージが語られました。出席者は23名で新来者1名、求道者1名、毎主日礼拝への出席が困難な方も2名来られました。

講演会では「平和の実現をめざして」と題して講演が行われ、近郊の教会と伝道所からも集まった31名の出席者は共に、主に在る交わりの喜びの中で福音のメッセージを受け取りました。絶えず福音を宣べ伝えること、祈り求めることの大切さ、そして、常に神さまが共にいて下さることを実感しました。全国の皆さまからのお支えに感謝いたします。これからも、地域へ福音を宣べ伝える教会として歩むことができますよう、皆様のお祈りに加えていただければ幸いです。



恵みに満たされた滝川教会